アンパンマンの苦悩

Hell

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと思い付いたので書いてみました♪

素人ですので文面がおかしなところが多々見受けられると思います（^__^;）

それでもよろしければ一度読んでいただけると幸いです♪

目次

アンパンマンの苦悩 ―― 1
外伝　ジャムおじさんの苦悩 ―― 5
外伝　バイキンマンの転機 ―― 8
外伝　かつてヒーローと呼ばれた男 ―― 12
外伝　かつてヒーローだった男 ―― 18

アンパンマンの苦悩

「パトロールに行ってきまーす」
やあ、僕はアンパンマン。皆のヒーローだ！
僕は皆を助けるために正義の味方として日々を過ごしている。
だけど…
「あっ！アンパンマン!!」
僕は…
「お腹すいた～」
「僕の顔をお食べ」
何のために…
「アーンパンチ!!」
「バイバイキーン！」
戦ってるの？
「アンパンマン、ありがとう！」
皆から感謝はされる。
「アンパンマン」
でも…どうしてかな…
「アンパンマン！アンパンマン！」
なにも満たされない…
「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！」
ヒーローであることを求められる…
「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！」
そこに自由はない…
「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！」
こんな生活…
「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！」
もう…嫌だ…
「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アン

パンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！

耐えられない…

「アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！アンパンマン！」

誰か…助けてよ…

「「「アンパンマン!!!」」」

僕は…何のために生きてるんだ…

ガッチャ…キィ…トン！

「…」

「何かあったのかい？…ただいまも言わずに」

ジャムおじさんが心配そうに僕に尋ねる。

「どうしたの？アンパンマン…」

ばたこさんも心配したのかそう言葉を掛け、僕のところまで歩み寄ってくる。

だから…僕は…

「アンパンマン？」

ばたこさんの首を

ボキッ！「え…？」

へし折ったんだ…

僕の握力なら首を掴んで少し強く握るだけで簡単にへし折れる。

「ば、ばたこさん!?…アンパンマン…何を？」

ジャムおじさんは腰を抜かし、なにが起きたかわからない顔でそう言いながらこちらをみる。

それを見た僕はジャムおじさんに近づき、

「何故なんじゃ…アンパンマグゥ!!?」

その顔を殴ったんだ…

顔を殴る

「止めるんじゃ…アンパ」

殴る、殴る

殴る

「止め…」

「どう…して…アンパンマ…ン…」

ただひたすらに殴り続けた…

ふと我に返ったとき、ジャムおじさんの顔は原形を留めていなかった…

冷たい肉の塊になったジャムおじさんとばたこさん

二人を殺した僕…もうヒーローじゃない…

ごめんなさい…ジャムおじさん、ばたこさん…僕はもう疲れちゃったんだ…

最初は皆を助けになれることを喜んだ…

皆の笑顔がみれて嬉しく思った…

ヒーローとしての自分を誇らしく思った…

だけど次第に皆の助けになることが苦痛になった…

皆の笑顔をみても虚しさだけが残った…

僕が皆を助けても、皆は僕の助けにはならないから…

そうした日々を過ごしていくうちにヒーローとしての自分が嫌になった…

僕はジャムおじさんとばたこさんが憎いわけじゃない…

だけど二人を見ていて、気がついたら手にかけていたんだ…

…あ…れ!?……体が重く…なって…意識が徐々に遠退いていく…

そうか…僕は命の石が溶けて全身を巡ってることで命を保っている…

だけど悪い子に対しては命の石は効力を失う…

ああ…僕は…死ぬのか…

ハハッ…死んだら僕も二人のところに行けるのかな…

いや、無理か…そうだよね…二人のところにいけるわけがないよね…

僕が行くのは多分地獄だろうから…

もう立っていられるほどの力もない…僕はそのまま倒れ伏した。

ああ…なんだか眠い…や…

ねぇ、ジャムおじさん、ばたこさん…もし…生まれ…変わることが…でき…たら…こん…どは…争い…ご…とのない…世界で…ヒーロー…じゃ…なく…二人…の…子…供と…して…さ…ん…にん…で…仲…良く…いっ…しょ…に…

Ｆｉｎ

外伝　ジャムおじさんの苦悩

「パトロール行ってきまーす」
「気を付けるんじゃよー」
いつもの挨拶…ワシにとって自慢の息子…アンパンマンが今日もパトロールに出掛けた。
血縁関係はない…じゃがワシとばたこさんが一生懸命作ったパンに命が宿った…ワシらの愛しい子供。
フフッ！ワシが父なら、ばたこさんは母か♪
アンパンマンは健やかに成長し今では人々を救うためにヒーローとしての日々を過ごしている。
じゃが…
最近、アンパンマンはいつも元気がない…
笑顔を見せることも無くなり、口数も減っていった…
昔はあれほど感情豊かで明るかったと言うのに…
もしかしたら疲れているのかも知れない…
…よし！今日はアンパンマンを労おう!!
顔のパンもいつも以上に手間隙掛け、美味しい料理を作って、いつも頑張っているアンパンマンと一家団欒楽しく過ごそうじゃないか!!
いつもアンパンマンは頑張っているんだ！
たまにはそんな穏やかなひとときがあっても良いじゃないか!!
そうと決まればこうしちゃおれん！ばたこさんやーい！
ワシは、ばたこさんにこの事を話した。当然ばたこさんも喜んで承諾した。
…アンパンマン、お前もこれでまた…ワシらに元気な姿を見せておくれ…
…準備は終わった。あとはアンパンマンが帰るのを待つだけじゃ。
ガッチャ…キィ…トン！
「…」
アンパンマンが帰ってきた…その表情はいつもと同じ無表情…と

うとうただいまという挨拶もない…
「何かあったのかい？ただいまも言わずに…」
ワシは心配になり、アンパンマンにそう尋ねた。
「どうしたの？…アンパンマン」
ばたこさんも心配になったのだろう…アンパンマンの元へ歩み寄った。
アンパンマン…色々思い詰めていることがあるのだろうが…ワシらは家族だ…どんな辛いことでも分かち合うのが家族…いや、親の務めじゃ。
だから…アンパンマン…
ボキッ！「え!?」
ばたこさんはその声を最後に物言わぬ骸となった。
ワシには理解することが出来なかった…
結婚こそしていなかったが、ワシにとっては妻のような存在のばたこさん…アンパンマンにとって母親同然のばたこさん…アンパンマンに殺された…ばたこさん…!?
「ば、ばたこさん!?…アンパンマン…何を？」
ワシには理解できなくて、でも体は理解したのだろう…恐怖のあまり腰が抜けて立つことすら儘ならない…
アンパンマンがこちらに近づいてくる。
何故じゃ…何故アンパンマンは無表情のままなんじゃ…
何故…アンパンマンの目から涙が流れ落ちているのじゃ…
何故…何故…何故…何故…!?
「何故なんじゃ…アンパンマグゥッ!!?」
ワシがアンパンマンに声を絞り出すように尋ねたのとアンパンマンが顔を殴ってくるタイミングは同じじゃった…
顔を殴られる
「止めるんじゃ…アンパ」
ワシの言葉は届いていないのだろう。
「止め…」
アンパンマンは何度もワシの顔を殴り続ける。

ダメじゃッ！それ以上罪を重ねたら…お前は…
その後ワシは何度も止めるように言ったがアンパンマンには届かない…
どうして…どうしてなんじゃ？アンパンマン…
「どう…して…アンパンマ…ン」
ワシらは、家族では無かったのか？
その直後ワシはアンパンマンの拳によって意識を刈り取られた…

ウゥ！…ここは…ワシはいったい…
痛みに耐え、辺りを見回すとそこはパン工房だった…
いつもと変わらないパン工房の設備、いつもと違って血塗れの床、いつもと違って物言わぬ骸となったばたこさん、いつもと違って倒れ伏したまま永眠っているアンパンマン…
やはり…あれは現実だったのか…
アンパンマン…すまない…お前の苦悩に気づいてやることが…できな…く…て
ばたこ…さん…や…ワシらはアン…パ…ン…マンの親失格だ…たんだね…
ワシも…もう…すぐ…二人…の…元へ…行く…よ。
そうし…たら…今…度こそ…3人…一家…団…欒…で…
Ｆｉｎ

外伝　バイキンマンの転機

「バイキンマン市長！」
「バイキンマン様!!!」
「あれがバイキンマン市長か!?」
沢山の歓声…私はバイキンマン。
この町の市長、今日は市長の就任式…かつてこの町の平和を脅かした私が、今では平和の為に従事することになるとはなぁ。
…なぁアンパンマン…今の私を見たらお前は驚くだろうな…

…時は巻き戻る

「なに!?アンパンマンが死んだだって!?」
俺様は驚くべきことをどきんちゃんから聞かされる…
「うん、ジャムおじさんもばたこさんが殺されてて、アンパンマンも死んでたって…食パンマン様から…多分…アンパンマンが二人を…」
そんな…どうして…何故アンパンマンが？
俺様には理解できない…奴は誰にでも優しく、そう…敵である俺様にもその手を差し伸べてきて…
正義感溢れる皆のヒーローで…なのにどうして…
「…どうするの？バイキンマン？」
どきんちゃんは俺様にそう尋ねるが
「…しばらく一人にしてくれなのだ…」
俺様にはそう応えることしか出来なかったのだ。
それから俺様はずっと家に引きこもってたのだ…何日も…何ヵ月も…何年も…
アイツが死んでから、悪事のことなどどうでもよくなってしまったのだ…俺様にとって今のこの世界はつまらないものになってしまったから…
そんな俺様のことなどどきんちゃんは愛想を尽かしたのだろう…
ある日、荷物を纏めて出ていったのだ…

なんでも今は食パンマンと一緒に違う星に移住したらしい…
この星は食材と細菌の夫婦には風当たりが悪いからだとどきんちゃんから送られてきた手紙に書いてあった…
二人は…いや…他の人々もアンパンマンが死んでからそれぞれの人生を歩んでる。
皆…強いな…それに比べて俺様は…
「もう許さないぞ!?バイキンマン!!」
お…お前は!?
「生きていたのか…!?アンパンマン!!」
俺様は驚く…もう会えないはずの宿敵と対峙したのだから…
「うん?当たり前だろ?」
アンパンマンは不思議そうにそう応えた…そうか…今までのはすべて夢だったのか!?なら…!?
「勝負だ!アンパンマン!!今度こそ俺様が勝つのだ!!」
「望むところだ!バイキンマン!!」
「「行くぞ!!」」

「ハッ!?」
辺りを見回すとそこは俺様の寝室だった…
そうかあれは夢だったのか…
ハハッ!そうだよな…アイツは死んだのだから…
俺様のせいなのか?…奴をあそこまで追い詰めたのは…
すまない…
俺様はずっと引き出しにしまっていたワクチンを取り出す…
今まで俺様はずっとこのことから逃げていた…これでやっと罪を償うことができる。
俺様はワクチンを口に含み、コップにいれた水を流し込もうとする…今まですすまなかった…アンパンマン…これで俺様も…
「そんなことをしちゃダメだよ…バイキンマン…」
ふとそんな声が聞こえ、思わず声がしたほうに振り向く…
「君がそんなことをしても誰も喜ばないよ…もちろん僕も…」

そんな…アイツは…確かに…
俺様は驚き、コップを落とす…
「なんで、なんでお前がいるんだ…アンパンマン!?」
俺様は思わず叫んだ…口に含んだワクチンもそのときに口からこぼれ落ちて、何処かへいってしまった。
「バイキンマンのことが心配でおもわず来ちゃった」
いつもの口調で…奴はそう語ったのだ…
「なんで…止めるのだ…俺様は…お前を…!?」
殺したも同然じゃないか!?そう言葉を続けようとするとアンパンマンが首を横に振る。
「バイキンマンのせいじゃないよ」
「僕は…もういくよ…バイキンマン、生きるんだ…誰のためでもない、君自身の為に…」
アンパンマンは俺様にそう言い背を向ける…
まっ…待つのだ！アンパンマン!!
「待つのだ!!アンパンマ…ぁ!?」
俺様がそう言い手を伸ばしたとき、奴はもうどこにもいなかったのだ…
俺様は…どうすれば…今さらみんなに合わせる顔もない…こんな俺様にどう生きろと…
そうだ…俺様は奴の遺志を継ぐのだ…形は違えど奴が望んだ優しい世界に…！
次の日、俺様は久々町を出た…俺様をみる町の皆の目は驚き、哀れみ、憎しみ、無関心とさまざまな色をしていた。
当然だろうな…何年も見なかった俺様が急に町を歩いているのだから…
俺様をアンパンマンの仇と見ている者もいるだろう…だが俺様はもう決めたのだ！この命を人々の為に使うことを！そのためにまだ俺様は死ぬわけにはいかないのだ！
そう決意を固めた次の日から俺様は町の為にさまざまな発明をした。

最初は俺様に不信感を抱く者、人殺しと石をなげる者、罵倒する者がほとんどだった。
それでも俺様は諦めず、何日、何ヵ月、何年も人々の為に働き続けたのだ…
そして時は流れ…
私は人々から認められ市長となった…
最初は贖罪の為に働いた…人々の為に…
次第に私を認める者が一人…二人と増えていった。
私へ笑顔を見せる者が増えていった…まぶしい笑顔を…
その笑顔を守りたいと思った…
そうした日々を過ごすうちに私は贖罪ではなく私自身のために働くようになっていった…
やがて私は全員に認められ市長となった…
かつてこの町にあった差別意識ももうない。
今では、妖精も、食材も、細菌も皆仲良く平和に暮らしてる。
アンパンマン…私が実現させた世界はお前が目指し、求めていた理想と同じか…？
私もいつかはそちらへ逝くだろう…
もしそこでお前と会えたなら私を殴ってくれ…
そしたらお互いを理解するために語り合おう…
今度は宿敵としてではなく、仲のいい友人として…
Ｆｉｎ

外伝　かつてヒーローと呼ばれた男

カランッ♪
「いらっしゃいませ」
やあ、みんな♪僕の名前は食パンマン♪
かつてヒーローとして活動していた男さ！
「しょ、食パンマン!?」
うん？何処かで見た顔だな…？
あれ!?もしかして…
「君は…カバオ君かい!?久しぶりだね！」
「久しぶり！食パンマン!!ドキンちゃんと他の星に移住したって聞いたけど戻ってきたの？」
「うん、そうだよ♪」
「しかし驚いたよ♪仕事のついでにパン屋さんによったら食パンマンが出てくるなんて♪」
久しぶりの再会だからだろうか…僕たちの会話も弾む。
「だろうね♪かつてのヒーローがパン屋をやっているなんて誰も思わないよね♪」
そう、僕は今パン屋さんを営んでいる。
「へぇ～そうなんだ♪でもなんでパン屋さんを？」
カバオ君もやっぱりそこが気になるのか…
「色々…あったんだよ…」
「え!?どんなことがあったの？」
彼は目を輝かせながら僕にそう聞いてきた。
「聞きたいのかい？」
「勿論！」
「良いよ♪…そうだな、なら僕が他の惑星に移住した頃から語ろうかな…」
「食パンマン…また不採用だったの」
僕が他の惑星に移住してまだ間もない頃…

「ゴメンよ…ドキン…」
僕は…無職だった…
「ううん、仕方ないよ…」
僕は、ドキンと…
「パパー♪ママー♪」
僕たち二人の愛の結晶である息子と三人で暮らしていた…
「でも、はやく仕事を見つけないと…お金が…」
そう…僕たちにはお金がなかった…家はボロボロのアパート…コツコツ貯めていた貯金でなんとか食べていけたけど、それももうすぐ尽きようとしていた。
「うん…無茶しないでね…食パンマン」
彼女はそんな僕を支えてくれる…僕には出来すぎた妻だった…
「うん…」
だから僕は彼女と息子の為にも仕事を見つけなければならない…だけど…
「フム、前職はヒーロー?…うちではちょっと…」
「君、資格は?え…ない?」
「やる気はあります…それだけだとちょっと…ねぇ?」
ここでは僕の、ヒーローとしての肩書きも、実績も通用しなかった。
来る日も来る日も、面接して返ってくるのは不採用ばかり…やがて僕の心は荒んでいった…
そして…
「食パンマン!いい加減にしてよ!!」
最愛の人からの怒声…
「うるさい!酒を持ってこい…!!ヒクッ」
僕は酒に溺れていた…そうすることでしか苦痛から逃れる術を知らなかったから…
「パパァ!ママァ!」
息子の、鳴き声…しかし僕は…
「喧しいぞ!黙れ!!」
ただただ怒鳴り付けるだけだった…

そうした日々を続けるうちに…
「もう貴方のことなんか知らない！…結婚なんてするんじゃなかった」
妻と息子は出ていった…
それでも僕は酒を飲み続けた…借金までして…
やがてアパートからも追い出された…
それでも…僕は飲み続けた…
フラフラと当てもなくさ迷いながら…
そしてとうとう体の方にもガタが来たのだろう…
僕は意識を失った…
「…ウ…!?」
目を覚ますとそこは何処か懐かしい雰囲気のする部屋だった…
「此処は…？」
どこだろう？そう疑問に思ったとき…
「目が覚めたようだね」
え!?この声は…僕は思わず声のする方向を見ると…
「どうやら驚かせてしまったようだね…」
あ…あり得ない…だって…あの人は…もう!?
「ジャ、ジャムおじさん…!?」
ジャムおじさん…アンパンマンによって殺されてしまった…僕にとっては偉大な人だ…
「ジャムおじさん？誰じゃそれは？」
しかし、彼はどうやら別人のようだった…
「すみません…昔の僕の知り合いと似てたものですから…」
そうだ…彼はもういない…
「此処は…何処ですか？」
僕は彼にそう聞いた…
「ここはワシのパン工場じゃ…申し遅れたな…ワシの名はチャップじゃ」
チャップさんと言うのか…しゃべりかたといい、職業といいあの人にそっくりだ…

「助けて頂いたようでありがとうございます…僕の名前は食パンマンと申します」
「いい名前じゃな…しかし何故あんなところで倒れていたのじゃ？」
　それは当然の疑問だろう…
「実は…」
　僕は、チャップさんにすべて話した。倒れていた理由、かつてヒーローとして活動していたこと、妻と出会いこの星に移住したこと、就職先が見つからず酒に溺れていったこと、それが原因で妻子に逃げられたことまで…
　チャップさんはただただ黙って僕の話を聞いてくれた…
「そうか…それは大変だったね…ところで…お腹は空いてないかい？」
　そう言われると確かに…
「これをお食べ」
　僕を見て感じ取ったのだろう…チャップさんは僕にそういってパンを差し出した…
「いただきます…」
　僕はそう言いパンをひとかじりした…
　美味い…だけどそれだけじゃない…これは…この味は…!?
　この味はかつて…僕たちがヒーローとして活動していた頃に味わっていた…
　ジャムおじさんのパンの…
「ウウッ！ウッ…」
　僕の目から涙があふれ出した…
「どうしたんじゃ！急に泣き出したりして…」
　僕はチャップさんの心配を他所に、ただただ泣き続けた…
「ごめんなさい…いきなり泣き出したりして…」
「大丈夫かね？」
「ええ…チャップさん一つお願いがあります…」
「次から次へと急に…何かね…」
　チャップさんは呆れながらも僕のお願いを聞いてくれるようだ…

「僕を…雇ってください!!」
僕は土下座をして彼にそう頼み込んだ。
「おい!?とにかく頭を上げてくれ!!」
チャップさんは驚き、慌てたように僕にそう言った…
それでも僕は頭を上げなかった。
「全く…雇うのは構わんが何故ワシのところで働きたいのか理由を教えてくれんかね?」
チャップさんはそう僕に聞いてきた…
「チャップさんのパンを食べて思い出したんです!僕が尊敬し慕っていた…偉大な人を…!僕はいまはただのクズだ…過去は変えられない…だけど未来は変えられる!一からやり直したいんです!偉大なあの人のようにみんなを笑顔に…そして僕を助けてくれたチャップさんのように…!だから…お願いします!」
僕はひたすら思いの丈をぶつけた…
「ワシの教えは厳しいぞ…それでもいいのか…?」
チャップさんは僕にそう言った…答えは勿論…
「よろしくお願いします!」
その日から、僕はパン職人の道を歩んだ…
その道は勿論厳しかった…何度も心が折れそうになった…それでも僕は働き続けた…毎日、毎日…
そして年月がたち…
「今は独立してパン屋を開いたというわけさ!」
「へぇ~そうだったんだ」
カバオ君は相当話に引き込まれたらしい…話し手としても嬉しいことだ♪
「でも…それじゃあ…」
彼は気まずそうな表情を浮かべそう言った…そう言えばまだ言ってないことがあるんだった…
「貴方~♪」
おっ!ちょうどいいところに来た!
その声を聞いたカバオ君は間抜けな顔になる。

スゴく面白い表情だ♪
「ドキンちゃん!?あれ!?どうして??」
カバオ君は大分困惑してるようだ。
「実はパン職人を続けていくうちに戻ってきてくれたんだ♪」
「なんだそうだったのか♪良かった～」
カバオ君は自分のことのように嬉しそうにそう言った。相変わらず優しい子だ…だけど…
「ところで…仕事のほうは大丈夫かい？」
僕がそう言うとカバオ君は自分の左手に着けている腕時計を見て、顔色が真っ青に変わっていった…
「いけない！もうこんな時間か…そろそろ僕は行くよ!!…息子さんにも合いたかったけど…」
「息子はバイキンマンのもとで働いてるから今日はいないよ」
「そうなんだ…凄いな～♪」
そういってもらえると嬉しい♪僕とドキンにとって自慢の息子だから…
「またパンを買いに来るよ♪それじゃ！」
「うん♪是非来てね！ありがとうございました～♪」
カバオ君が笑顔でそう言ってくれたのが嬉しくて、僕も笑顔で見送った。
そう…かつて人々から尊敬されたヒーローとしての僕はもういない…
だけどみんなを笑顔にしたい気持ちはあの頃と変わらない…
だから僕は戦い続ける！
僕がかつて尊敬し、未だ目標として僕の道を照らしてくれる偉大な人達と同じパン職人として…
Ｆｉｎ

外伝　かつてヒーローだった男

「キャー！カレーパンマン様」
「カレーパンマン様だ！」
「カレーパンマン、カレーパンマン」
沢山の歓声…それを聞いた俺は彼らに手を振る。
それを見た彼等はよりいっそう大きな歓声を送った。
俺の名はカレーパンマン…かつてヒーローだった男…
今はこの町の市長を勤めている。
一から作り大きくなった町…俺を慕う町の人々…
だがまだ足りない…その為に俺は…！

「薬をくれ…金ならある…」
「まいどあり♪ほらよ！」
ケッ！この薬中が…
借金作って偽りの快楽に浸ってよォ！
人間のクズだなコイツはァ！
まぁコイツらクズのお陰で俺の懐も潤ってるんだがな…ククッ…
ハハハハハハ！

今日はバイキンマン市長の対談を行う…
大事な話だ…
おっ、どうやらバイキンマン市長が来たようだ…
「ようこそ！俺の町へ!!」
「久々だな…カレーパンマン…君と顔を最後に会わせたのはいつだったかな？」
「…お互い色々あったからな…積もる話もあるがその辺は今日の対談で話そうか…」
俺はそう言いかつての宿敵…今は市長を勤めているバイキンマンを会議室のほうまで案内した…
会議室の中で俺達は対談を始める…

俺達の会話も弾み、雰囲気も穏やか…対談はスムーズに行われていった。
「それで…？今回私を呼んだのは何も昔話や町の商業、社会福祉の相談だけではないのだろう？」
対談中にバイキンマンがふと、そう聞いてきた。相変わらず頭がきれる野郎だ。
「ああ…そろそろ本題に移ろうか…」
そろそろ言おうと思っていたことだ…バイキンマンのほうから切り出してくれるのなら俺も話しやすい…
「実は…技術提供をお願いしたい」
それ聞いたバイキンマンは少しの間何か考えを巡らせていた…
「何故？…そもそもどんな技術を欲しているんだ？」
考えが纏まったのだろう…バイキンマンは俺にそう聞いてきた…
「治安維持と生産に関わる技術だ…」
俺はそう言い話を続ける
「この町は非常に大きくなった…だがその弊害で深刻な問題が出ている」
「貧富の差か…」
バイキンマンは答えを予想していたのだろう…だが貧富の差だけではない…
「それもある…だがそれだけではない」
俺がそう言うとバイキンマンは目を細めた。
それを見て俺はさらに話を進める…
「最近、市民らにどこからか薬が出回っているんだ…無論俺も出どころを調査したが未だに尻尾が掴めない…このままでは被害は増える一方だ」
「なるほど…それで私を呼んだと言う訳か」
「その通りだ…無論それ相応の報償は支払う…だから協力してくれないか？」
バイキンマンはフムと手を顎にあて思案を始めた…しばらくしてバイキンマンは俺にこう言ってきた。

「条件がある」
バイキンマンは以下の条件を出してきた。
・技術提供に辺りそれに見合うだけの金額。
・互いの生産物の輸入、輸出
・お互いの町の技術に用いた共同開発。
・治安維持に辺り互いの町の市民の法律に基づく　逮捕権
…他にも色々あるが大体こんな感じだ…
「勿論だ…むしろこちらにも有利な条件も多い…むしろこちらからお願いしたいくらいの条件だ…」
俺が交渉しようと思っていた案件もあるくらいだ。
「決まりだな…私はこれで失礼するよ…書類を纏めなくては行けないからね…」
バイキンマンはそう言うと席をたつ…
「町の入り口まで見送ろう…バイキンマン…感謝する…」
俺は心からそう言った。
「どういたしましてと言うべきかな…私は平和のためなら協力は惜しまないよ」
バイキンマンがそう言ってくれて俺も助かる…本当にありがとう…
町の入り口まで歩いて進み、俺は奴を見送った…
後日、バイキンマンから『今度私の町に招待したい…一ヶ月後にどうだろうか』とメールが届いた。
勿論俺は二つ返事で返した…一ヶ月後が楽しみだ…
「今度、バイキンマンの治安維持システムを導入するという情報が入ったが…大丈夫なのかボス？」
俺の部下が不安そうにそう聞いた…
全く何を心配することがあるのかね…
「クハハハハハハァ！何をそんなに怯えているんだ!!」
「しかし！…もし足がついては!!」
「安心しろ…全ては想定の範囲内だ…」

俺がそう言うと部下も安心したのだろう…安堵の表情を浮かべる。
「そんなことよりもだ…この女はもうダメだな…」
「ウッアーァ…」
全く…薬付けにして楽しんだらすぐに壊れちまった…
「どうなさいますか？」
そうだな…これだけボロボロならそのまま売っても価値もないからな…
「ばらしてパーツだけ売り払え」
そう言うと部下は女を引きづるように連れていった…
なあアンパンマン…俺はお前のようにはならない…
命尽きるまで人生を謳歌してやるぜ…クククッ…
ハハハ…クヒャハハハハハハハハ!!!!

今日はバイキンマンとの会合する日…俺は身支度を終え、リムジンに乗り込む…大事な日だ…緊張もあるが無事に終えなくては…
「ようこそ私の町へ…すぐに案内しよう」
バイキンマンはそう言うと俺を会議室まで案内していった…
「では改めて以前話していたことを確認していこう。」
バイキンマンは俺に以前言った条件を改めて説明していった。
前と変更点はないようだ…
「…以上の条件に不満がなければこの契約書にサインしてくれ。これで提携は正式なものとなる。」
勿論、俺がやることはひとつだ。
「喜んでこの条件を呑もう…これで良いか」
バイキンマンは契約書を確認し首を縦に振った。
「契約成立だな…よろしく頼むぜバイキンマン！」
これで俺の目的は達成された…たがこれで終わりではない…
これからいそがしくなるな…
「ああ、すぐ手配しよう」
バイキンマンがそう言い指を鳴らすと出てきたのは武装した警察だった…

「これはどういうことなんだ…バイキンマン…」
何故？何故なんだ…
「これで…君を合法的に拘束することが出来る」
どうして…ドウシテナンダ…バイキンマン!!
「何を…言って…」

「もう終わりだ…カレーパンマン…いや、裏社会を統べる麻薬王よ…」
何故俺が麻薬王であることがバレている…
「なんで…どうして…何時から」
いったい何時からだ！
「最初からさ…大人しくしろ！さもなければ貴様を撃つ!!」
バイキンマンは俺にそう言ってきた。マントはないから空に飛んで逃げることはできない…だがな…貴様は肝心なことを忘れているようだなァ！
「クヒャハハハ！撃ちたきゃ撃てよ!!だがな…そんな鉄の塊が俺様に通用するものかよ!!」
バイキンマンはそれを聞くと苦悶の表情を浮かべた…良い気味だ…
「お前の部下は全員逮捕した…もう抵抗は無意味だ!!」
わかってねぇ…わかってねぇな細菌の王様よォ!!
「だからどうした！俺様は生きている!!生き続ける限り俺様は人生を楽しみ続けるぜ!!例えそれが他者を傷付けることであってもなァ！」
俺が生きている限り俺は終わらねぇンだよォ!!

「もうなにも言っても無駄なようだな…全員構えろ!!」
号令を聞いて警官隊は構える…やる気のようだなァ！かつてヒーローだった俺とよォ！
「撃て!!」
パンッ！パパパンッ！パーン!!
響き渡る銃声…こんなもの聞くかよ!!さーてどうやって逃げようかな…いっそコイツらの血で部屋を赤く染め上げてもおもしれぇだろうなァ！
パンッ！
「なんだ…高みの見物かと思ったが…お前も参加するのか…バイキンマン」
馬鹿な奴だ…わざわざ死にに来たらしいな…
「もう終わりだ」
こんな銃弾1発で終わり？馬鹿かこいつは…
どうやら過大評価し過ぎたようだな…
「フハハハハ…こんなもので終わりだと!?おもしれぇ冗談…グッ！」
突如訪れる痛み…これはどういうことだ…
「無論…ただの弾丸ではない…貴様に撃ち込んだのはウィルスバレット…堕ちた英雄を蝕み殺す唯一の弾丸だ!!」
ウィルスバレット…だと…なんだそれは…こんなところで俺は…ふ、ふざけんじゃねぇエエエエ!!!
「こんな…こんなもので俺はァ！グッ！グアアアアア!!!」
痛い…痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いィィィイ!!!
体が徐徐に変色し腫れていく…
「もう終わりだ…お前は…俺様とアンパンマンが目指した平和な世界には不要なのだ…」
アンパンマンが平和な世界を目指していた…だと…
ふざけるなぁ!!!
貴様は死の恐怖に狂い、自分の都合の良い解釈でいきる喜びを保っているだけだろうがァ！
奴は…アンパンマンは生きる喜びも…愛も希望も…自由すら奪わ

れた者の成れの果て果てじゃないか!!!
俺は、俺はそんなのは御免だ!!!
俺は生きるんだ！自分のために!!!
その為なら他人がどうなっても構うものか!!!
「お前が…お前如きがアンパンマンを語ってンじゃゃネェェエゾォォオ!!!グッ！アアアアアアアァァァァァァァ!!!!」
嫌だ…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だァァ!!!
こんなところで俺は…俺はまだ生きたいんだ！
生きて幸せをてにいれるんだ!!!
「死にたくない…死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない…ウゥ…ウァァアアア…」
意識が遠退く、嫌だ…俺はまだ…
「皆♪いつもお疲れ様♪ご飯ができたぞ♪」
「うーわ♪美味しそう♪今日は食パンマンとカレーパンマンも一緒なんだね♪」
「ええ、私たちも呼ばれたんですよ♪」
「ああ、今日はお前の初パトロールだからな♪お祝いもかねてな♪」
思い出すのはあのときの光景…
「皆…ありがとう…」
「なにしんみりしてンだよ！」
「そうじゃぞ」
「そうですよ」
「それじゃあ食べよう♪…皆…手を合わせて！」
「「「「いただきます！」」」」
ウォ…ウマ…ゴホゴホ
チョット…オチツイテタベテヨ!!!
マッタクモウ…ハハハハハ!!
なんで…なんで今になってこんなことを思い出すんだ…
幸せな…幸せだった…あの頃を…
「俺は…お…れ…は…」
Ｆｉｎ